作品紹介

短編小説部門　煌賞　上間　彗斗

『サンガツの海』

窓を開けると、海が一望できる。視力が弱いので水平線がぼやけるけれど、それでも海は真っ直ぐに広がっていて、これだけ見ていれば地球がとても球体だとは思えない。朝陽が差し込んで、部屋に濃淡が生まれた。潮っぽい風が、潮っぽい部屋の匂いを新しくする。

海はいつも、私の側にあった。家の目の前が防波堤になっていて、そこから波音が絶え間なく聞こえてくる。それはすごく私の身近なもので、聞いていたいとも、聞きたくないとも思ったことはない。波音はただずっとそこにあって、私もまたそこにいた。

学生服に着替えて、私は一階へと降りる。テーブルに朝食だけが二つ置かれている。私と兄の分だ。両親はもう仕事に出てしまっている。

この家は、昔は商店をやっていた。祖父と祖母が一緒になって経営していたけれど、客の入りはさっぱりだった。私も幼心ながら聞いたことがある。お客さんいなくて大丈夫なの、と私が言うと、祖父は小さく笑いながら、こんなの暇つぶしさ、と答えた。もう今では祖父も祖母もいないけれど、ガラスケースやダンボール(ママ)なんかが残っていて、暗がりの中で埃を被り続けていた。

兄はまだ寝ているようだった。大学受験に失敗して、それからずっと家にいる。普段なにをしているのか、私にはわからない。受験に失敗したとき、兄はへらへら笑っていた。昔から、恐ろしく意思のない人だと私は思っていた。兄妹だけれど仲が良いわけでもなく、かといって悪くも無かった。必要なこと以外をしない人で、いつも顔の筋肉を少しも使わないような表情をしている。きっとなにも考えていないか、もしくは考え過ぎているのだろうと思う。

不意に思い立って、兄の寝ている部屋に向かった。ドアをノックして開ける。部屋はベッド以外になんにも無くて、病的なほど綺麗だった。物で溢れているより、なにも無い方がずっと気味が悪い。兄は布団に包まっていた。部屋は酷く生活感がなかった。兄は確かにそこに寝ているけれど、いつ消えてしまってもおかしく無いような気がした。

「朝食くらいちゃんと食べたら。ずっと寝てても仕方ないでしょ」

私の声は届かないかと思ったけれど、布団はもぞもぞと動き出した。布団から顔を出した兄は、無言でベットから立ち上がる。私は目をあわせたくなくて、逃げるようにしてドアを閉めた。台所に向かいながら、兄に声をかけたことを少しだけ後悔していた。

私には、兄はどうも苦手だった。

テーブルについた私は、酷い空回りを感じていた。なにを話すのか、どうやって会話していくかを気にしていたのは、私だけだったらしい。二人で席に着いて、特に美味しくも無い出来合いの朝食を食べるけれど、兄はずっとうわの空だった。馬鹿らしくなって、私も気にするのを止めた。私の中で兄を消して、1人で食べているんだと思うことにした。

テレビのニュースは頭の中をすっと流れてゆく。その瞬間だけ、確かにそこに留まるけれど、一度意識を変えてしまえば、もうどこにも姿は無くなってしまう。僅かに触れていった感触だけを残して、たとえ、それが殺人でもゴシップでも、いつかは消えて無くなる。私は運転事故の被害者に同情して、それから、きちんと加害者にも同情した。そのくらい私は普通の人間だった。

兄はご飯を美味しそうに食べない。それなら、なにを食べたって同じだろうと思う。それは私も、不味いご飯をさも美味しそうに食べろなんていわない。けれどその、食べることに対してなんとも思ってないような態度に、無性に嫌気が差した。嫌気が差すのは、だからまだ、私が兄を完全に消しきれていない証拠だろう。

「美味しい？」

私は出来るだけ感情を込めずに聞く。兄は目玉焼きの切れ端を口に運びながら、うんともすんとも言わずに呻いた。

「美味しいか美味しくないかくらい、ちゃんと答えてよ」

別に私が作った料理でも無いのだけど、無感情な兄の様子にまた腹が立った。私は人形の相手をしているのではない。なにも思わなければ、それは死んでいるのと同じだ。そしてなにも伝えなければ、それもまた、私たちにとっては死んでいるのと同じだ。

兄はもう、なにも感じていないのだろうか。

溜め息を吐いて、私は時計へと目を遣る。そろそろ家を出ないといけない。自分の分の食器を一つに重ねて、私が椅子から立ち上がろうとすると、兄が不意に手を伸ばした。指先で、なにかを指し示している。

「胡椒取って」

しわがれた声で、兄が私に言った。親しみ深さを感じて、そのあとから懐かしさがやってきた。順序がおかしい。自分でも変に動揺しながら、兄に胡椒を手渡した。兄は黙って胡椒を振る。自分が喋ったことにも、それに動揺している私にも、少しもおかしさを感じていないようだった。

私は、じゃあね、と言ってテーブルを離れてみた。なにも聞こえなかったけれど、返事があったのかどうかは、私にはわからなかった。

三月の空はいつもなら軽やかだけれど、今日は少し雲で重たい。そのせいで海も重たいし、私の足取りも重たい。防波堤に沿って高校へと向かう。そろそろ終業式で、今のクラスは後少しで終わる。特別好きなクラスではなかったけれど、次のクラスだって、特別好きにはならないだろう。あんまり学校が好きではなかった。特に理由は思い当たらないのだけど、理由がわからないことが私は少しだけ嫌だった。それならいっそ友達がいないだとか、勉強が嫌だとか、そういったものがあればいいのだけど、学校へ向かう私の両足はわけもわからず重くなる。

なんだか酷い閉塞感だった。目的地なんて決めたはずはないのに、どこにも歩き出した覚えはないのに、それでいて迷子になっているみたいだった。

私はバッグから音楽プレーヤーを取り出して、イヤホンを耳にいれる。波音が急に遠くなって、自分がさっきまでの場所から隔離されたみたいになる。私は波音を聞いていたいとも、聞きたくないとも思わない。それは私がこの場所を、好いてもいないし拒んでもいないということなのだろう。

ふと、イヤホンは人を孤独にするよ、とクラスの女の子が言っていたのを思い出す。彼女は痛い子として接されていたけど、それはあながち間違っていないと思う。でもイヤホンが人を孤独にするんじゃなくて、孤独だからイヤホンをしているんだと、私はそう思った。

なにも考えないようにして歩き続ける。なにも考えなければ、学校に行くことなんて簡単だった。

もうすぐ終業式なのに、クラスは一人を仲間はずれにしていた。例のイヤホンの女の子だ。数名の女子が、私にも無視するようにと頼み込んできた。そのときのことは、あまり思いだしたくない。きっと私は、苦笑いをしてやり過ごしていただろう。それを仮に処世術と呼ぶなら、私なんてここにいない方がいい。こんな私が世の中を上手く渡って、それでどうなるというのだろう。別に、本音としてはいじめなんてどうだっていい。イヤホンの子だってどうでもいいのだし、だから私が本当に悔しいのは、あんな人たちの頼みを自分可愛さから聞いてしまったことだ。ここに私の意思なんてない。私は兄と、そのとき少しも違わなかったのだ。

空が赤みを増していって、海がゆっくりとその赤をなぞる。夕暮れの防波堤からは、朝に出て行った船がいくつも帰ってくるのが見えた。あの漁師たちは、そのままどこかに行きたくはならないのだろうか。船をロープで繋いでいるのを見て、私は少しやるせない気分になる。ここに帰ってきたって、なんにもありやしないのに。それでも彼らが帰ってくるのは、もしかするとあの海の向こうにも、何にも無いことを知っているからかもしれない。

防波堤から海の方を覗き込むと、頬に飛沫が当たった。防波堤を打つ波音が下から追り上がってきて、空へと吸い込まれてゆく。

そういえば、そうだったのだ。

私はずっと前から知っていた。

この町で生まれて、この家で育って、あるときは商店で、祖父祖母と来もしない客を待ちながら。あるときは気の重くなる登下校の最中で、ふっとイヤホンを耳に押し入れたその瞬間。

そんなときに私は、いつだって波音の側にいた。波が防波堤を打って、飛沫になって散り散りになってゆくその音を、私はいつだって聞いていたのだ。私はずっと気付いていた。私たちがどこにも行けないこと。私がどこにも行けないこと。

私は立ち上がって、防波堤から見える限りの波を見詰める。またこの瞬間にも、一つの波がここへと辿りついて、そして消散する。それでもなお波は生まれ続けて、ここや別のどこかへと向かい続ける。もういいと思った。こんなのは十分だと思った。私の声が届く限りの波へと、もう来ないでいいと叫びたかった。私たちはどこにも行けない。ここで止まるし、ここで留まる。水平線が残酷なほどに赤みを増してゆく。徐々に暗がりも見せていって、海もやがては色を失うだろう。漁師たちは家へと帰るだろうし、私もまた家へと帰る。

それはすごく当たり前のことで、けれどそれを受け入れられない私がまだそこにあった。

本当はわかっている。私は今、苦しくなんて無いのだ。苦しいふりをしているだけで、どこにも行けないのならば、私はそれを認めてしまえばよかった。

私はここにいるしかないのに、どこかへと行きたがるから、私のここは牢へとなってしまう。もういい加減、こんなことは終わりにするべきだった。

私が一人であることも、私がどこにも行けないことも。

私が意思を持たないことも、私が苦しいふりをするのも。

全部、ただ一度認めてしまえばいい。きっとそのとき初めて、私はそれを否定できるのだろうから。

背後で、大きくシャッターの開く音がした。振り返ると、家の商店のシャッターを開く兄の姿があった。店の内側から、両腕で重そうにシャッターを持ち上げている。私はそれを、静かに見詰めていた。胸の辺りまで持ち上げると、兄は一息でシャッターを上げきって、息を切らせながら私の方へと歩いてくる。私の目の前まで来て、防波堤に座る私を見上げた。

なにか言ってくるかと思ったけれど、思いがけず言葉も無く見つめ合う形になってしまって、私はすっと目線を外した。

「どうしたの、シャッターなんか上げて」

私は海の方へと目線を移して、兄へと声をかける。

「商店、始めようと思って」

波音に紛れるくらいの小さな声で、兄は答えた。そう、と私も小さく返事をする。自分でも気づかないほど少しだけ、顔が綻んだ。

「お客なんて誰も来ないとおもうよ」

言っていて、それが大切なことでは無いくらい、自分でもわかっていた。だから私は、努めて楽しそうにそれを声にした。

兄が防波堤に登って、私の隣に立った。目の前を白っぽい鳥が飛んでいって、まるで今日を追っていくみたいにして、夕陽へと向かっていった。

「綺麗だね」

ぽつりと言葉を呟いても、兄はやっぱり返事をしなかった。けれど今このときは、返事なんていらないような気がしていた。

波がまた一つ弾け飛んで、私たちの耳へと届く。一つ一つのこの波音を、ずっと忘れないようにしようと思った。

私がここにいてもいいのだと、心からそう思えるような、そんな日がやって来るまで。

煌賞
受賞者インタビュー

上間　彗斗さん

自分の思っていること、考えていること、問題としていることを小説にしました。小学生の頃から小説を書いていました。今回、自分の作品が初めて評価され、受賞することができたのですごく嬉しいです。

問い合わせ
浦添市立図書館　☎876-4946